



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                                               |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | インターンシップにおける教育的意義                                                                                             |
| Author(s)        | 亀野, 淳                                                                                                         |
| Citation         | 工学教育, 52(4), 25-29<br><a href="https://doi.org/10.4307/jsee.52.4_25">https://doi.org/10.4307/jsee.52.4_25</a> |
| Issue Date       | 2004-07-20                                                                                                    |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/35325">https://hdl.handle.net/2115/35325</a>                             |
| Type             | journal article                                                                                               |
| File Information | kameno.pdf                                                                                                    |



# インターンシップにおける教育的意義

Educational Significance of Internship

亀 野 淳<sup>\*1</sup>

Jun KAMENO

The universities and companies which are introducing internship are steadily increasing in number. In this paper, I analyzed the educational significance and future problems of internship focusing on a questionnaire for students participating in internship programs. As a result, it became clear that although these students were generally fairly satisfied, as regards educational significance, internship was somewhat less meaningful when compared to taking a job or developing professional values. The actual training period was of the order of 10 days, however the period should have been rather longer in the engineering faculty, and more practical training was desired. Therefore, it appears that various internships as regards training periods and detail should be considered according to a student's needs and objectives.

Keywords : Engineering Education, Students, Intern, Questionnaire, Educational Effects

キーワード：工学教育，学生，インターン，アンケート，教育効果

## 1. まえがき

インターンシップを導入する大学や企業は着実に増加している。また、北海道内においても、北海道通商産業局（現北海道経済産業局）が中心となり、1998年に産学官からなる「北海道地域インターンシップ導入促進連絡会議」が設立された。さらに、2002年には、道内大学等が主体となった「北海道地域インターンシップ推進協議会」が設立され、同事業を推進している。

本稿においては、インターンシップの参加学生に対するアンケート調査等を中心に、その教育的意義や今後の課題について、工学系とそれ以外の学生との相違に着目しながら分析を行う。

## 2. インターンシップのこれまでの動き

我が国においては、インターンシップは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」<sup>1)</sup>と定義されており、行政においても、1997年の文部省、通商産業省、労働省（いずれも当時）による3省合意<sup>2)</sup>をもとに、その積極的な推進を図っている。こうした動きを反映して、大学におけるインターンシップは急速に拡大している。文部科学省によると、授業科目として位置づけてインターンシップを実施している大学は317校（実施率46.3%）、学生数は約2万6千人となっており、その数は着実に増加している（2002年度）<sup>3)</sup>。このように、大学にお

けるインターンシップが普及してきたのはわずか数年の動きである。しかしながら、工学教育に関していえば、かなり以前より「工場実習」等の名称で現在インターンシップと称されるものを実施されていたことには留意する必要がある（我が国におけるインターンシップの歴史については、<sup>4)</sup>が詳しい）。

インターンシップが上記のように普及してきた背景としては次の3つがあげられる。①大学における専門的な知識や能力あるいは幅広い教養に対する学習意欲の喚起、②離職率の増加とその原因と考えられる職業意識の希薄さの改善、③産学連携による高度な人材育成の場である。この3つはそれぞれ、旧文部省、旧労働省、旧通商産業省の政策目的と合致するものであり、この3省が中心になりインターンシップを推進してきた理由がここにある。

北海道においても、道内大学等が主体となった「北海道地域インターンシップ推進協議会」が2002年に設立され、インターンシップ事業を推進している。現在、同協議会には道内17大学、短大、高専が加盟しており、同時に、産業界、行政とも連携をとりながらインターンシップの普及・拡大に努めているところである<sup>5)</sup>。

## 3. 参加学生に対するアンケート調査結果

### 3.1 調査概要

本アンケート調査は、「北海道地域インターンシップ推進協議会」が2002年度に実施したインターンシップ事業に参加した学生を対象としたものである。参加者192名に調査票を配布し、139名から回答があつ

平成16年1月6日受付

\*1 北海道大学高等教育機能開発総合センター

た（回収率72.4%）。

回答学生のうち、96名が文系、43名が理系（うち、37名が工学系）となっている（表1）。学年は学部3年生が9割弱と最も多い。これは工学系でも同様である（表2）。

表1 文系、理系別参加学生

|     | 全 体  | 文 系 | 理 系 | 工学系 |
|-----|------|-----|-----|-----|
| 人 数 | 139名 | 96名 | 43名 | 37名 |
| 割 合 | 100% | 69% | 31% | 27% |

表2 学年別参加学生

|       | 全 体  | 工 学 系 | 工学系以外 |
|-------|------|-------|-------|
| 1 年 生 | 1%   | 0%    | 1%    |
| 2 年 生 | 8%   | 8%    | 8%    |
| 3 年 生 | 86%  | 89%   | 84%   |
| 4 年 生 | 2%   | 3%    | 2%    |
| 大学院生  | 4%   | 0%    | 5%    |
| 合 計   | 100% | 100%  | 100%  |

（注）各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

表3 業種別参加学生

|           | 全 体  | 工 学 系 | 工学系以外 |
|-----------|------|-------|-------|
| 建設業       | 7%   | 27%   | 0%    |
| 製造業       | 4%   | 11%   | 2%    |
| 電気・ガス・水道業 | 4%   | 5%    | 3%    |
| 卸売業       | 2%   | 0%    | 3%    |
| 小売業       | 14%  | 3%    | 19%   |
| 金融業       | 13%  | 3%    | 17%   |
| サービス業     | 37%  | 27%   | 40%   |
| 情報サービス業   | 8%   | 11%   | 7%    |
| 行政機関、各種団体 | 19%  | 24%   | 17%   |
| 合 計       | 100% | 100%  | 100%  |

（注）各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

### 3. 2 業種

実施先企業の業種では、情報サービス業を含めたサービス業が約4割を占めている。工学系では、サービス業と建設業がそれぞれ3割弱となっている。ただし、工学系ではサービス業のうち、情報サービス業が多くなっているのが特徴的である（表3）。

### 3. 3 参加目的

インターンシップに参加した目的をみると、「将来の職業・業種を選択するための経験として」、「就職活動に役立てる」などが多くっており、ほとんどの学生が自らの就職を念頭において参加していることがわかる。しかし、「今後の学校生活の目標を明確にしたい」、「学校での学習や実社会との関連性を見つけるため」、「卒論等のテーマを見つけるため」といった大学での学習や生活の向上に関することは上記と比較するとやや低くなっている。

しかし、これを工学系と工学系以外で比較すると、「学校での学習や実社会との関連性を見つけるため」、「今後の学校生活の目標を明確にしたい」、「専攻分野の業界を知りたかった」などの大学での学習や生活の向上に関する項目で工学系が有意に高い割合を示している。つまり、工学系の学生は就職関連だけではなく、大学での学習・生活も目的としていることがわかる（表4）。

### 3. 4 参加目的別達成度

3. 3 でみた参加目的別に達成度をみると（表5、表6）、就職に関する事項は達成度がかかなり高いのに対し、学習に関する事項は相対的に低くなっている。達成度が低い「大学での単位取得のため」及び「卒論等のテーマを見つけるため」については、半数近くが「全く達成できなかった」と回答しており、回答のばらつきがやや大きくなっている。

また、達成度の平均では、工学系では工学系以外と比較して学習や生活に関する事項もやや高くなっているが、必ずしも有意な差ではない。回答のばらつきを比較すると、「将来の職業・業種を選択するための経

表4 インターンシップの参加目的（複数回答）

|                         | 全 体 | 工 学 系 | 工学系以外  |
|-------------------------|-----|-------|--------|
| 就職活動に役立てる               | 91% | 95%   | 89%    |
| 将来の職業・業種を選択するための経験として   | 96% | 95%   | 96%    |
| 社会経験を通じて自分に足りない能力等を見つける | 85% | 95%   | 81%    |
| 学校での学習や実社会との関連性を見つけるため  | 65% | 84%   | 58%*** |
| 今後の学校生活の目標を明確にしたい       | 68% | 81%   | 63%*   |
| ビジネスマナーを身につけたい          | 78% | 78%   | 78%    |
| 派遣先企業に関心があり、詳しく知りたかった   | 73% | 81%   | 70%    |
| 大学での単位取得のため             | 49% | 65%   | 43%*   |
| 専攻分野の業界を知りたかった          | 56% | 76%   | 49%**  |
| 卒論等のテーマを見つけるため          | 48% | 62%   | 42%*   |

（注）工学系と工学系以外について $\chi^2$ 検定において，\*\*\*： $p<0.005$ ，\*\*： $p<0.01$ ，\*： $p<0.05$

表5 インターンシップの達成度 (平均と標準偏差)

|                         | 全 体         |             |             |
|-------------------------|-------------|-------------|-------------|
|                         |             | 工 学 系       | 工学系以外       |
| 就職活動に役立てる               | 3.92 (0.91) | 3.89 (0.93) | 3.93 (0.90) |
| 将来の職業・業種を選択するための経験として   | 4.17 (0.83) | 4.26 (1.01) | 4.14 (0.76) |
| 社会経験を通じて自分に足りない能力等をみつける | 3.96 (1.03) | 4.14 (0.91) | 3.88 (1.08) |
| 学校での学習と実社会との関連性を見つけるため  | 3.80 (1.05) | 3.94 (1.03) | 3.73 (1.06) |
| 今後の学校生活の目標を明確にしたい       | 3.60 (1.01) | 3.67 (0.96) | 3.56 (1.04) |
| ビジネスマナーを身につけたい          | 3.78 (1.10) | 3.66 (1.01) | 3.82 (1.13) |
| 派遣先企業に関心があり、詳しく知りたかった   | 3.60 (1.14) | 3.33 (1.09) | 3.72 (1.15) |
| 大学での単位取得のため             | 2.06 (1.37) | 2.29 (1.49) | 1.93 (1.30) |
| 専攻分野の業界を知りたかった          | 3.55 (1.14) | 3.71 (0.98) | 3.46 (1.22) |
| 卒論等のテーマを見つけるため          | 2.20 (1.11) | 2.26 (1.05) | 2.16 (1.15) |

(注) 1. (大いに達成) = 5, (ほぼ達成) = 4, (どちらともいえない) = 3, (あまり達成できなかった) = 2, (全く達成できなかった) = 1 とし、各項目ごとの平均値を算出したもの  
2. ( ) 内は標準偏差

表6 インターンシップの達成度の回答割合

|                       | 大いに達成 | ほぼ達成 | どちらとも<br>いえない | あまり達成で<br>きなかった | 全く達成で<br>きなかった | 合 計  |
|-----------------------|-------|------|---------------|-----------------|----------------|------|
| 将来の職業・業種を選択するための経験として | 38%   | 47%  | 11%           | 2%              | 2%             | 100% |
| 工学系                   | 51%   | 34%  | 6%            | 6%              | 3%             | 100% |
| 工学系以外                 | 33%   | 52%  | 13%           | 1%              | 1%             | 100% |
| 大学での単位取得のため           | 9%    | 6%   | 25%           | 3%              | 57%            | 100% |
| 工学系                   | 13%   | 8%   | 25%           | 4%              | 50%            | 100% |
| 工学系以外                 | 7%    | 5%   | 25%           | 2%              | 61%            | 100% |
| 専攻分野の業界を知りたかった        | 22%   | 35%  | 27%           | 10%             | 6%             | 100% |
| 工学系                   | 18%   | 50%  | 21%           | 7%              | 4%             | 100% |
| 工学系以外                 | 24%   | 26%  | 30%           | 12%             | 8%             | 100% |
| 卒論等のテーマを見つけるため        | 2%    | 8%   | 41%           | 9%              | 41%            | 100% |
| 工学系                   | 0%    | 9%   | 43%           | 13%             | 35%            | 100% |
| 工学系以外                 | 2%    | 7%   | 40%           | 7%              | 44%            | 100% |

(注) 1. 平均のばらつきが大きかった4つの項目についてのみ記述した。  
2. 各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

験として」が工学系でばらつきが大きく、また、「専攻分野の業界を知りたかった」では、工学系以外のばらつきが大きくなっている。前者については、工学系では「大いに達成」が約半数いる反面、「あまり達成できなかった」及び「全く達成できなかった」が約1割いることによる。後者については、工学系では、「ほぼ達成」が5割ありこの回答に集中しているが、工学系以外では、回答がかなり分散しており、「あまり達成できなかった」及び「全く達成できなかった」も約2割いる。これは、工学系は比較的専攻分野に近い業種にインターンシップに行っているのに対し、工学系以外では必ずしもそうでないことが影響しているのではないかと考えられる。

学生の自由記述の中には、「色々な現場を見学することができ、大学での講義との関連性が理解できた。自分の目標に向かって頑張ることができる」や「大学での学習と実務で使われる知識の違いを知ることができた」といったインターンシップでの実習と大学での学習の関連に関する意見もあった。

### 3. 5 実習期間

実際の実習期間(実働日数)は10日間が過半数を占めており、平均日数も約9日である。工学系でも同様であるが、工学系以外と比較するとやや日数が長く、11日以上のものも約2割ある(表7)。また、適当だと思える実習期間(実働日数)をみると、工学系、工学系以外とも「10日程度」が半数を占めているものの、工学系ではやや長期間の実習を希望する学生も多く、「30日以上」も約2割を占めている(表8)。さらに、実際の実習日数が適当であったかどうかについては、実習日数が10日以下の学生は「適当だった」が多くなっているものの、11日以上は、「長かった」と「短かった」に意見が分かれている(表9)。これは、実習期間が長く、負担が大きかったという学生と、長期間の実習によりおもしろさがわかったのもう少し実習をしてみたかったという学生に分かれたものと思われる。学生の自由回答をみても、「期間が短すぎて、もう少し期間が長ければ、このプロジェクトも参加できたのに……」ということがあったので、最低1カ

表7 参加学生の実習期間

|         | 全 体           | 工 学 系          | 工学系以外           |
|---------|---------------|----------------|-----------------|
| 5日間以下   | 19%           | 9%             | 22%             |
| 6～9日間   | 18%           | 6%             | 22%             |
| 10日間    | 54%           | 66%            | 51%             |
| 11～15日間 | 8%            | 17%            | 5%              |
| 16日間以上  | 1%            | 3%             | 0%              |
| 合 計     | 100%          | 100%           | 100%            |
| 平均日数    | 8.9日<br>(2.7) | 10.3日<br>(2.8) | 8.4日**<br>(2.6) |

(注) 1. 工学系と工学系以外の平均の差の検定において, \*\*:  $p < 0.01$   
 2. ( )内は標準偏差  
 3. 各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

表8 適当だと思う実習期間

|       | 全 体            | 工 学 系          | 工学系以外            |
|-------|----------------|----------------|------------------|
| 5日程度  | 20%            | 5%             | 25%              |
| 10日程度 | 50%            | 51%            | 50%              |
| 15日程度 | 20%            | 19%            | 20%              |
| 20日程度 | 5%             | 5%             | 5%               |
| 30日以上 | 5%             | 19%            | 0%               |
| 合 計   | 100%           | 100%           | 100%             |
| 平均日数  | 11.5日<br>(5.8) | 15.0日<br>(8.0) | 10.3日**<br>(4.0) |

(注) 1. 平均日数は「n日程度」は「n日」, 「30日以上」は「30日」として計算  
 2. 工学系と工学系以外の平均の差の検定において, \*\*:  $p < 0.01$   
 3. ( )内は標準偏差  
 4. 各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

表9 実習期間別にみた期間の感想

|        | 短かった | 適当だった | 長かった | 合 計  |
|--------|------|-------|------|------|
| 5日間以下  | 38%  | 58%   | 4%   | 100% |
| 6～9日間  | 17%  | 71%   | 12%  | 100% |
| 10日間   | 25%  | 63%   | 12%  | 100% |
| 11日間以上 | 42%  | 25%   | 33%  | 100% |
| 合 計    | 27%  | 60%   | 13%  | 100% |

月は必要だと思います。」といった記述もあった。これは、企業の実習プログラムにもよるが、何か特定の課題をこなすといった内容のプログラムを希望している学生であれば10日間では不十分であるという意見であろう。また、企業においても「10日間程度ではどうしても会社見学的な内容にならざるを得ない」といった声もあった。ただし、「企業側の負担も大きく、また、長期間のカリキュラムを作成するのは困難である」という意見もあった。

そこで、適当だと思う日数を従属変数、実際の実習日数と工学系の学生であることを独立変数とする重回帰分析を行うと、実際の実習日数が長いほど、また、工学系の学生であることの方が4日程度、より適当だと思う日数が長くなるという有意な関係を見ることができた(表10)。

表10 適当だと思う日数に関する回帰分析推定結果

|             | 係 数   | 標準化係数 | t 値      |
|-------------|-------|-------|----------|
| 定数項         | 5.859 |       | 3.830*** |
| 実働日数(日)     | 0.519 | 0.253 | 3.052*** |
| 工学          | 3.644 | 0.289 | 3.485*** |
| $\bar{R}^2$ |       | 0.179 |          |
| SE          |       | 5.061 |          |

(注) 1. 工学は、工学系 = 1, 工学系以外 = 0 とするダミー変数  
 2. \*\*\*:  $p < 0.005$

表11 インターンシップ終了後の満足度

|           | 全 体            | 工 学 系          | 工学系以外           |
|-----------|----------------|----------------|-----------------|
| 大いに満足     | 29%            | 43%            | 25%             |
| 満 足       | 50%            | 43%            | 52%             |
| どちらともいえない | 17%            | 11%            | 20%             |
| 不 満       | 3%             | 3%             | 3%              |
| 大いに不満     | 1%             | 0%             | 1%              |
| 平 均       | 4.04<br>(0.81) | 4.27<br>(0.77) | 3.96*<br>(0.81) |

(注) 1. 平均は、(大いに満足) = 5, (満足) = 4, (どちらともいえない) = 3, (不満) = 2, (大いに不満) = 1 とし、算出したもの  
 2. 工学系と工学系以外の平均の差の検定において, \*:  $p < 0.05$   
 3. ( )内は標準偏差  
 4. 各構成比の合計が四捨五入の関係で100%にならないものもある。

### 3. 6 インターンシップの満足度

インターンシップ全体の満足度をみると、おおむね満足度は高いといえる。特に、工学系では、「大いに満足」が4割強を占めるなど、より高い満足度となっている(表11)。しかしながら、参加学生の中には、「話を聞くばかりで受身なところが多かったので達成感に欠けたと思います。何か1つでも仕事といたしますか作品といたしますか、やり遂げたかった」、「実務研修のほとんどが『見学』のようなものであったので、実際に設備にふれることが少なかった。机上の知識を得ることも重要だが、実際に体を動かして得る知識も重要であると考えてるので、より一層カリキュラムを充実してほしい」、「実習の内容が明確でなかった。実習というより現場見学だった。現場の様子も忙しそうだったので、学生の相手をしている暇はないという感じだった。10日間は長かった。」などの意見もあり、インターンシップのプログラムの内容に関して改善の余地は大いにあると思われる。

### 4. インターンシップ実施企業の声

3. では参加学生のアンケート調査をもとに分析を行ったが、ここでは、実施する側の企業についてのヒアリング調査をもとに企業側の意向をみることにする(ヒアリング調査の詳細については、<sup>6)</sup>を参照)。

学年については、学部3年生の参加が多いが、「大学院修士課程修了者の採用が多くなっているの

士課程1年次におけるインターンシップを増やしてほしい」(サービス業A社)といった意見もあった。

プログラムの内容については、上記でみたように、学生の不満の声もあったが、企業側においても、「プログラムの内容について大学側はもっと積極的に提案してほしい。企業に対する提案や要望があれば言してほしい」(製造業B社)、「派遣される学生の情報が少なく、どのような授業を受け、どのような関心があるかわからないので事前に詳細な個人情報の提供や本人へのアプローチをさせてほしい」(情報サービス業C社)などの意見もあった。つまり、企業側もプログラムの内容について大学あるいは学生との連携を図り、より充実したものとしたいという希望があるものの現時点では不十分であるという認識を持っているといえる。

また、大学教育全般に対しては、論理的な思考を身につけるために基礎学力をより重視し、教養教育の充実を求める声もあった。具体的には、「工学部の学生であっても、哲学、心理学、政治学などの勉強もしてほしい。論理的に物事を考える能力を身につけるためにはこのような勉強は不可欠である」(サービス業A社)という意見があった。また、「より専門性が求められているので、専門的教育をもっと充実してほしい」(製造業B社)という専門教育の充実を希望する企業もあった。

## 5. 今後の課題

3. でみたように、インターンシップに参加した学生の満足度はおおむね高く、一定の成果をあげていると評価することはできる。ただし、インターンシップの教育的意義については、就職や職業観の育成といった意義と比較するとやや小さいという結果となっている。これについては、学生の参加意識との関連もあるが、実習期間や企業のプログラムにも改善すべき点があると思われる。具体的にはより長期で、特定のプロジェクトに参加できるような内容のものであり、この志向は工学系の学生により強くみられる。しかしながら、あらゆる目的をすべて満足させるようなインターンシップを単一の制度や機関で実施することは困難であり、目的に応じて実習期間や内容など多様なインターンシップのあり方を検討すべき時期に来ているのではないかと考える。

## 謝 辞

本稿は、平成15年度工学・工業教育研究講演会の発表をもとに加筆・修正したものである。同講演会のセッション座長及び貴重なコメントをいただいた諸先生方に感謝申し上げる。また、本稿で使用したアンケート調査の実施・集計に当たっては、北海道経済産業局、財団法人北海道地域総合振興機構のご協力をいただいた。

## 参 考 文 献

- 1) 通商産業省：経済構造の変革と創造のための行動計画，大蔵省印刷局（1997）
- 2) 文部省，通商産業省，労働省：インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（[http://www.jil.go.jp/jil/kisya/syokuan/970918\\_01\\_sy/970918\\_01\\_sy\\_kihon.html](http://www.jil.go.jp/jil/kisya/syokuan/970918_01_sy/970918_01_sy_kihon.html)）（1997）
- 3) 文部科学省：大学等における平成14年度インターンシップ実施状況調査結果（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/11/03111801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/11/03111801.htm)）（2003）
- 4) 田中宣秀：高等教育におけるインターンシップの導入・現状・課題，中・高等教育における「インターンシップ」—職業・専門教育と雇用・就職の関連構造に関する日・独・中比較研究（国際共同研究中間報告書）—，名古屋大学教育発達科学研究科・技術職業教育学研究室（2002），62-74
- 5) 北海道地域インターンシップ推進協議会：平成14年度北海道地域インターンシップ推進協議会成果報告書（2003）
- 6) 亀野 淳：企業側からみたインターンシップのあり方—北海道内のインターンシップ実施企業に対するインタビュー調査をもとに—，生涯学習研究年報，9（2003），27-52

## 著 者 紹 介



亀野 淳

1987年3月 広島大学経済学部卒業  
1987年4月 労働省入省  
2001年3月 北海学園大学大学院修士課程修了，経済学修士  
2001年7月 北海道大学高等教育機能開発総合センター助教授  
専門：人的資源管理論，労働政策，生涯学習